



カントウータ

# Cantuta

No. 59



標高 4200m のアンデス高原に生きるラクダ科の「ビクーニャ」(エドゥアルド・アパロア自然保護区：  
風景写真家 松井章氏撮影)

1. タンザニア滞在記(その6・最終回) ..... 上崎 雅也
2. 日本人移住地訪問記(3)コロニア・サンファンとコロニア・オキナワ  
を訪ねて ..... 松井 章
3. 千葉県多古町のラテンミュージックフェスタが生まれるまで  
..... 鈴木 咲希
4. ボリビア開拓記外伝—コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を  
生き抜いた人々— 10 ..... 渡邊 英樹
5. ボリビア家庭料理雑感 ..... 細萱 恵子
6. 『ボリビアを知るための65章(第3版)』ご紹介 ..... 大島 正裕

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

# 1. タンザニア滞在記

## (その6・最終回)

一般社団法人 日本ボリビア協会  
常務理事 上崎 雅也

この滞在記も今回で最後になるが、ここまではお楽しみ頂けたでしょうか。最終回に、何を書くべきか迷ったが、タンザニアとボリビア多民族国（以下「ボリビア」）の共通項を敢えて列挙し出来れば比較してみたい。出来るだけタンザニア、ボリビア両国の個性を尊重しつつもアフリカvs.中南米の比較になる点もあるかも知れないが、ご容赦頂きたい。

また、中南米を離れて長いので一部情報が旧聞に属する内容になっているかもしれない。この点もご容赦頂ければ幸いです。

### 1. 共通語制定の苦勞と国民性への影響

滞在記「その1」に記載したが、タンザニアでは交易上の共通語としてザンジバル島のスワヒリ語方言（以下「スワヒリ語」）が広く使われてきた。初代大統領ニエレレは、この利点を利用し、この「スワヒリ語」を英語とともに公用語として採用した。

同時にニエレレは、ほぼすべての児童を生育過程で親から引き離し遠隔地に就学させ、他の地域からの生徒たちと机を並べ寄宿生活を経験させる制度を導入していた。その結果、スワヒリ語が共通言語として広く普及し機能し始めたことは、言うまでもない。

日本で例えるならば、多様な方言に満ちていたこの国を明治政府が制定した「標準語」を絶対的共通語に指定し、東京で生まれた児童を札幌、大阪、福岡など、或いは、鹿児島で生まれた児童を仙台や名古屋に進学させ、寄宿させた例えられるような制度だ。明治維新当時の地域方言は、ほぼ相互理解が出来ないほど、差異

があったと想像されるが「共通ことば」としての標準語制定から大正時代になってラジオで全国に流れたことで全国に普及したというのが大まかなプロセスだろうと筆者は、想像している。

ニエレレの政策の根幹である「民族融和」がアフリカでタンザニアほど成功した例を耳にしたことは、ない。ルワンダにおけるツチ族虐殺、スーダンにおける内戦など民族、宗教が要因となって起こる紛争が多い地域だが、タンザニアには、民族対立がまず存在しない。そのせいかタンザニア人は、国民性がのんびり、穏やかに感じられる。

この民族対立の問題は、中南米でも存在する（した）と思うものの、スペインによる4世紀にわたる植民地支配を通して、民族対立の形が支配層（主に白人）vs. 被支配層（一部メステイオンを含む先住民系）に変容してしまったと思う。これは中南米全般について言えるものの、特に先住民人口比率の高いアンデス諸国（ボリビア、ペルー、エクアドル）でその傾向を顕著に感じる。特に先述したタンザニアにおける共通言語は、先住民語であるスワヒリ語であるのに対して、殆どの中南米諸国では支配者言語であるスペイン語、ポルトガル語が共通語として採用された。

ボリビアでは、エボ・モラレス政権誕生後の2009年2月に制定された新憲法でスペイン語に加えて県ごとに異なる複数の先住民語が共通語として使用できるようになったものの、国民全体を繋ぐ言語は、旧宗主国の言語であるスペイン語だけである。私が知る限り、先住民の子供は、小学校に入学して初めてスペイン語の会話と読み書きを学ぶことになる。そうするとどうしてもスペイン語を母語とする子供たちに学力面で勝てない。加えて、欧州系支配層と先住民

系被支配層は、外見上も大きく異なる為、統一感のある「国民性」はなかなか生まれにくいように感じる。新憲法誕生と並行して各県の地方自治が強化され、欧州系の多い東部低地と先住民系の多い西部高地が融和していない現実が国民性の不統一に反映されてしまっている様に感じる。ボリビアでは、先住民族だけをとりても30以上の民族が存在するが、最大勢力であるアイマラ人、ケチュア人の気質は、前者が頑固で意地っ張り、後者は、もう少し柔軟で優しい気質だと聞いている。私自身先住民の言葉を話せないで、これが事実なのかどうか検証できないでいる。結局、ボリビア人の国民性とは何かという点については私にもよく分からないというのが正直なところだ。

## 2. 仕事への責任感と生き方

タンザニア滞在中にドドマのホテルで日本人牧師の一家（牧師ご夫妻と3歳の長女と生後6か月ぐらいの長男との4人家族）と遭遇した。6年間にわたり奥地の教会で布教活動をされてきたとのことだった。牧師さんであるお父さんに、「6年間付き合ったタンザニア人ってどんな人たちですか？」と伺ったところこんなネガティブな返事が返ってきた。

- ・自分の能力に限界を設けてしまい、それを言い訳に必要な努力をしない。
- ・自分で出来ないから直ぐに人に頼り、他人の援助を受けて当然と考えてしまう。

「そんなにネガティブなのか？」と思ったが、やっぱりそうだった。幾つかのエピソードをご披露したい。「直ぐに人に頼り、他人の援助を受けて当然と考える」人には、結構私もその後遭遇したが、命にもかかわるケースも耳にした。日本でクラウドファンディングを通じて集めた寄付金を使い、日本製の立派なパン焼き設備を購入して、一人でダルエスサラームにベー

カリーを起業した若い日本女性がいた。大学を卒業してまだ数年しか経っていなかったが人間的に非常にしっかりした慈悲深い女性であった。彼女は親に見捨てられたストリートチルドレンを多く雇い、パン焼き技術を彼らに教え経済的に自立させるべく頑張っていた。

若いのに「肝っ玉母さん」のように腹が据わり大きな「母性」の持ち主だったが、ある日彼女が最も信頼し、可愛がっていた起業当初からのスタッフに現金を持ち逃げされるという事件が起きた。それでも彼女は、毎日気丈に営業を続けていたが、この男はこともあろうに他のスタッフを引き込み再度ベーカリーに侵入し、二度目の盗みを働いた。この時は、彼女が偶々現場にいた為、遭遇する事態となった。

彼女は、最初の犯行を温情で警察に届けていなかったのだが「今回はダメだよ」と諭そうとしたところ、彼は、ナイフを懐から取り出して彼女を脅す暴挙に出てしまった。幸い彼女は、怪我することなく、彼はそのまま逃亡したらしい。彼女が警察に届けたかどうか定かではないがこの裏切り者の元スタッフは、まだ他のスタッフたちと交流が続いたらしく、残ったスタッフもどこまで信頼して良いのやら彼女も一抹の不安を感じていた様だ。しかし、彼女は、とてつもなく深い母性と慈愛でめげることなく営業を再開していた。その後の経緯は残念ながら聞いていないが、アフリカではこの様な出来事は、枚挙に暇がない。タンザニア在住30年の日本人からも「タンザニア人には、義理人情は、通じない」と断言された。タンザニア人自身からも「タンザニア人を頭から信用しちゃ駄目だ」とも言われた。ガーナに長く住んだ日本人からも、彼らは、親切にされても真に感謝することはなく「肌が白い人間がアフリカ人を助けるのは、当たり前」とすら考えているとのことだった。

タンザニアの殆どの若者は、就職先が見つからず、地域や親戚に助けてもらいアルバイトで日銭を稼ぐしかない。何かあれば地域や親戚が助けてくれる。依存心、依頼心が強くなる。だから一人一人が頼りない。自己が確立されていない上、若いときから仕事をしていないので集団行動や作業も出来ない、使えない人材として育ってしまう。2年ほどの現地滞在中の経験で、あの日本人牧師のネガティブな感想が実感できた。ただ、例外もある。



写真1-1 モロゴロ（ダルエスサラームと内陸部の首都ドドマの中間に位置する町）に東南アジア資本で建設された最新鋭の精米工場を見学。説明しているのは、インド系のマネージャー。日本のコメ生産事情にも精通し驚くほど優秀だった

インド系住民は、違う。タンザニア国籍であろうがインド国籍のままであろうが、彼らは、全員英語を流暢に操り、数字に強いのできちんとした仕事ができる。多くの大手企業のオーナーがインド系だし、タンザニアのホテル、レストラン、銀行、農場、自動車販売店等ありとあらゆる職場でトップや管理職は、インド系だ。アフロ系タンザニア人では、代替できないのだ。インド系は、明らかに自分たちとアフロ系には能力差があると考えているので、両者の関係は良好ではない様だがインド系タンザニア人を国民性判断の基準に加えるべきかどうか私は、まだ悩んでいる。

さてボリビアは、どうだろうか。私が駐在中に

経験した人間関係から判断する限り、義理人情の理解については、まったく日本人と感覚的に大差なく、寧ろ日本人以上に義理を忘れず、人への感謝を、きちんと示してくれる人が殆どであったと感じている。この点では、何の違和感もなくお付き合いできたと思う。

仕事上の能力についても、欧米系人材と先住民系人材間に差はあるにせよ、きちんと仕事を仕上げるという意味での責任感は、十分あるのではなかろうか。詰まるところ一緒に仕事をするなら、私は間違いなくボリビア人を選ぶことになりそうだ。

### 3. 複数の人種・民族が構成する階級社会

タンザニアでは、殆どの職場で管理職がインド系だと書いた。また現地に駐在中、南アフリカやボツワナ、ジンバブエ（と言ってもビクトリア滝だけだが）とナミビアに観光で訪れる機会を得た。そこで感じたことは、やはり業種を問わず、管理職は、白人かインド人が多いことだった。

東アフリカ一帯は、「インド洋文化圏」でインド商人が古くから活躍する場ではあったが、南アフリカを始め南部アフリカ一帯でも相当数のインド系人口が生活している。これは、英国が植民地経営のためにインド人をアフリカに連れ出して、アフロ系住民を管理する為に自分たちの手足として使った事にも由来するようだ。インド系は、やはり英語が上手いし事務や計算がしっかりしている。その点、アフリカ系はのんびりしていて、作業がのんびり、鷹揚とも言えるし、切れ味が悪いとも言える。白人がインド人を使いたかったのも理解できる。インド系住民は、アフロ系住民を能力が低いと馬鹿にし、自分たちの能力の高さを誇示することもある。両者は同じ国籍であっても、同じ学校で学んでも、婚姻関係を結ぶことは、稀だ。気質も異な

る。まして白人はインド系とすら婚姻関係は結ばず、おそらく心理的にも欧州人のプライドを胸に生活しているように感じた。南アフリカのケープタウンでは、写真1-2のようにアフリカとは思えない風景に出くわす。



写真1-2 観光地として知られるテーブルマウンテン（ケープタウン）

南アの白人は、ケープタウン郊外の欧州としか思えない街並みのステレンボッシュやフランシユフック（フランス人が入植）などに住み、欧州に負けない品質のワインを飲み、ケープタウンに勤務して、まったく欧米水準の生活をしている。ホテルのハウスキーパー、道路の清掃人やガードマン等の現業仕事は、すべて黒人である。アパルトヘイトは、制度としては消えても確立した社会構造として残ってしまっている。

残念ながら、中南米、特にボリビアにおいてはこの傾向は、同様にはっきりしている。欧米系の客や主人に先住民系の店主や使用人が仕える構図と全く同じであった。先住民系の女性の多くは、女中（Empleada）として「通い」または「住み込み」で働き、低賃金で働く構図は、今も変わらず続いているであろう。中南米と言えは「人種差別がなく肌の色に関係なく比較的平等な社会だ」と勘違いしている日本人は多いが、中南米、アフリカの双方を知る身としては中南米も結局は社会構造としての「アパルトヘイト」は存在していると思えない。残念だがこれは、冷徹な現実である。

実は、この南アフリカ旅行からタンザニアに戻った翌日、国連組織がケープタウン大学等南アから招いた講師によるセミナーに出席したのだが、オランダ系白人（ボーア人と呼ばれ、一般に差別意識が英国系よりも強いとされている）の講師がタンザニアの公務員達を前に、立て板に水の「お前たちに教えてやっているんだ」と言わんばかりの流暢なKing's Englishで講義をまくし立てていた。この講師は、「白人の重荷」を背負っているのだろうか。

アフリカにおける白人と黒人の人種問題は、根深く深刻である。これまでは、殆ど混じりあうことのないように思える両者の関係を建前だけの美しい表現で整え、現実を糊塗する歴史を繰り返してきた。しかしながら近年、アフリカ全体で黒人の中間所得者層が増加しているという現実が存在しており、両者が対等な立場で対峙する時が近づいてきているようだ。その時に何か爆発的な混乱が起きてもおかしくないような気がしている。

タンザニアとボリビア、アフリカと中南米、両地域合計で90近い国々が存在する。何世紀もの植民地支配に苦しみ、人種・民族の違いが生む経済格差や階級格差など社会的問題を抱え、成長し、時に躓き、「発展途上国」「新興国」と呼ばれながらもその数だけの票数が国連の様々な決議で行使される。そんな存在でもある。米国で中南米諸国を標的として不法移民排除を標ぼうする政権が誕生した。就任後2ヵ月を待たず、世界を驚かす政策を次々に発表しているが、これからどのような政策が展開されるか、世界が戦々恐々としている中で、グローバルサウス或いは中南米、アフリカ諸国やBRICSのメンバー国が殆どのこれら地域の票田がおかしな方向で利用されないことを祈るばかりだ。

（終わり）

## 2. 日本人移住地訪問記（3） —コロニア・サンファンとコロニア・ オキナワを訪ねて—

風景写真家 松井 章

### ＜サンファン移住地3＞

日比野さんのご自宅を後に、池田さんは車をヤパカニ川へと走らせます。河原にご家族とご友人がいらっしゃるとのことで、農道から藪の中へとランドクルーザーは突っ込んでいきます。日本では考えられないほどに、ワイルドな道と運転に心が躍ったものです。2 m以上もある草をバリバリとなぎ倒して、何度も車はバウンドしながら河原の砂浜に出ました。

砂浜では池田さんのご家族と友人の大堀さんご家族が水辺で遊んでいました。小さな子供たちが水浴びをしている風景は、日本のどこにもある風景で、ポリビアとは思えないような雰囲気です。



写真2-1 池田さんと大堀さん家族と一緒に川遊び

とはいえ、ヤパカニ川を見渡せば、ポリビアのアマゾン上流部らしい野生の気配が漂います。巨大な河原からは雨季にはとてつもなく増水することが想像できました。護岸工事されることはなく無数の丸太が岸に漂着していました。河川敷で、アマゾンの片鱗を感じさせる風景を見た後に、サンファンの町中にあるラーメン屋へと向かいました。ラーメン屋を切り盛りして

いる女性は、中村みちこさんです。食堂の様子は日本の地方にどこにでもあるような雰囲気です。「道の駅」をイメージして、地元で加工された食べ物が並べられています。サンファン移住地で採れる生産物を、そのまま地元で加工・販売までもする取り組みが始まっているそうです。ドライ・マンゴーのパッケージには、スペイン語と日本語の両方が記載されていました。ここで美味しい手打ちの塩ラーメンをいただきました。



写真2-2 養鶏業に従事する野田さんご家族

午後は、野田利行さんのご自宅へ。野田さんは鹿児島県ご出身の一世の方です。33歳の時、まさに開拓の最初の時代に来ました。お聞きする話は、やはり開拓時からの苦難の連続です。水も満足に確保できない厳しい生活でした。重機も無く、すべてが人力です。畑を作るためにまずはジャングルの伐採から始まります。木はとても大きく太さも高さも、日本には無いような大木です。2人がかりで大きな鋸で木を切り倒します。水や食料の確保をすべて自分たちで行う自給自足の生活でした。

自然の猛威もすさまじく、鉄橋を作ったのにヤパカニ川の氾濫により流されてしまったりと、いつまでも苦労は続くようでした。その厳しい生活から、サンファン移住地を出てしまう家族も後を絶たなかったそうです。

この時代、伐採した木材の製材所というものは

なく、家も家具も全てを自分たちで作りました。釘も針金もなかなか手に入らないほどで、ここに生きるには知恵が必要であったそうです。それでも、子供たちの教育には大きく力を入れて、開拓の初期には移住地内に自分たちの資金で学校を建設しました。

このような苦しい生活で転機となったのは、生産する農作物の種類を改めて、焼き畑から機械化・大規模農業へと切り替えてからでした。この時代に養鶏業は特に大きく成功を収めました。当時のボリビアでは、卵は満足に自給できていない高級食品でした。サンファン移住地の卵は、ボリビアでの卵の消費を大きく伸ばし、卵の普及に大きく貢献することになりました。その卵は、陸路でアンデス高原の大都市ラパスまでも運ばれて、野田さんのご家族も養鶏業により生活が安定したそうです。



写真2-3 CAICY (サンファン農牧総合協同組合)

夜は、池田さんのご自宅へ。食事前にお風呂を貸していただき、2週間ぶりに湯舟に浸かりました。台所では池田さんご家族が集まり夕食の準備をしています。潤平さんのお母様の典子さん、弟の篤史さん、潤平さんの奥様の朋子さん、朋子さんのお父様の川合進さん、篤史さんの奥様の奈緒さん、そして子どもたちという大家族です。

ホットプレートで焼肉を食べて、日本のおかずも交えた大家族の賑やかな夕食です。ボリビア

の日系人の皆さんがどのような生活をしているのか興味があったのですが、それは日本と同じ温かい家庭の風景でした。

翌日、池田さん宅で朝食をいただきました。新鮮な卵の卵かけご飯とお味噌汁です。「食」ほど、自分のアイデンティティを感じさせるものはないのではないだろうか、感動しながらいただきました。食後は、家の裏にある養鶏場へ案内していただきました。時代とともに、サンファンの卵のシェアは下がっていて、少しずつ規模は小さくなっているそうです。

その後、サンファン学園へ。朝の登校時間に門で先生が生徒を出迎えています。礼儀正しく朝の挨拶とともに門をくぐる子供たちを迎えているのは本田由美さんです。日本では教頭先生に当たる方です。サンファン学園はサンファン日本ボリビア協会が運営する学校です。開拓時代に子供たちへの教育だけはしっかりとしようという願いとともに建設された学校です。時を経て、今は約300人ほどの生徒がいる立派な学校になっています。小学生から中学生までの共学です。



写真2-4 サンファン学園の朝礼風景

この日は、校庭での朝礼から始まりました。日本とボリビアの旗を掲揚し、君が代とボリビアの国家が流れることに驚きました。整列しながらも少し体をゆらゆらさせながら、先生のお話をじっと聞いている姿を見れば、自分の小学校

時代を思い出させました。

朝礼が終わると、まずは校長先生のDimelsa Jeannette Morales Mamaniさんに挨拶しました。その後で、日本語の特別クラスへ。サンファン移住地は、時代とともに日系人の数は減り、学校に日系人が占める割合も約30%ほどに減少しているそうです。日本語が得意な子を集めた特別クラスに行くと、8名ほどの生徒が日本語での授業を受けていました。



写真2-5 サンファン学園の日系人日本語クラス

学校の運営委員も務める池田潤平さんは、日本語の継承だけではなく、日本の礼儀を重んじる文化も教えています。この学校で学ぶ子は、卒業してからも優秀な人材に育つそうです。

学校訪問の後は、サンファン日本ボリビア協会を訪問して再び日比野会長にご挨拶をしてから、農協の商店を訪問しました。農協に加入している人だけが買えるシステムの様です。ピックアップトラックに荷物を乗せている農家の方などもいて活気があります。

そして、サンファン移住地で最も重要な存在であるCAICY（サンファン農牧総合協同組合）の精米工場へ。移住者の皆さんが農業組合で力を合わせることで、大規模農業へとシフトして、サンファン移住地は豊かになりました。この農協は、サンファン移住地のエンジンであり、シンボルなのです。農閑期とはいえ、工場には

出荷を待つ大量のお米の袋が積み重なっていました。

“米どころ”として有名なサンファン移住地ですが、訪れた6月は冬の乾季に当たり、まだ稲作を見ることはできませんでした。池田さんの農場では、グアバ畑へ。池田さんは少し恥ずかしそうに日本の農地とは異なるでしょうと言いますが、そのどこまでも続く巨大な農地で、様々な農作物にチャレンジする姿には、日系人としての謙虚ながら大きな気概を感じました。

この日は運よく、稲作の準備作業を見ることはできました。水を引く前の水田を耕すために、弟の篤史さんと従業員が、日本では見たことのないような大きなトラクターを運転していました。かつて開拓当初は、稲は陸稲での栽培でしたが、いまは水稻がメインとなっています。近くには農業試験場もあります。ここで品種改良されて、移住地の方が効率的に栽培できるようにしているそうです。



写真2-6 広大な農地を巨大なトラクターで耕す稲作の準備

2日間、たっぷりと日本人移住地の生活を見せていただいたから、池田さんご家族にお別れをして、私はコロニア・オキナワを目指しました。

※サンファン移住地編の執筆では、池田潤平さんに情報の確認などをご協力いただきました。ありがとうございます。（つづく）

### 3. 千葉県多古町のラテンミュージックフェスタが生まれるまで

多古町役場 地域おこし協力隊  
鈴木咲希（サキシータ）

大学でたまたまスペイン語専攻を選んだことが、まさか私の人生を大きく変えるとは思いませんでした。卒業後、偶然ボリビアに住むことになったあの日から、気づけば千葉県多古町でラテンミュージックフェスタを開催し、これまでの3年間で延べ1,000人以上の方々にボリビアのフォルクローレをはじめとする中南米の音楽を届けることができました。

はじめまして。千葉県多古町で地域おこし協力隊として活動している鈴木咲希と申します。ボリビア在住時代のあだ名をそのまま引き継ぎ、町の皆さんからは「サキシータ」という愛称で親しまれています。千葉県多古町でどうしてラテンミュージックフェスタが開催されるようになったのか、についてお話ししたいと思います。

私は今年の4月で社会人7年目を迎えますが、そのうち最初の2年間はボリビアのラパスで勤務していました。「なぜボリビアだったの?」とよく聞かれますが、その答えは本当に「偶然」です。大学で学んだスペイン語を活かせる仕事を探していたときに、たまたま見つけた求人がボリビア勤務だったのです。スペイン語圏であればどこへ行くことになってもおかしくない状況でしたが、縁があってボリビアで2年間を過ごしました。

ボリビアでの思い出の中でも、特に印象に残っているのはカーニバルです。オルコのカーニバルはもちろん、小さな町のカーニバルに現地の友人たちと参加しました。ボリビアに知人がい

なかった私にとって、初めて心を許せる居場所が出来た気がした大切な思い出の一つです。

また、仕事で訪れた小学校の子どもたちとの出会いも忘れられません。どこへ行っても大人のそばには必ず子どもたちがいて、みんな温かい笑顔で話しかけてくれました。彼らの素直で明るい姿は、私にとってボリビアの魅力そのものでした。



写真3-1 大使館勤務時代、現地の小学校で日本語授業

私が帰国したのは2020年3月のことです。もう一度中南米で海外勤務をしたいという夢を抱いていた私にとって、世界的な状況の変化は予期せぬものでした。海外勤務の道は一度断たれましたが、都会の満員電車が何よりも苦手な私は、地方での生活を選び、「いつかまた世界に出られるときのために、新しい知識と経験を積んでおこう」と心に決めました。そんなときに出会ったのが、多古町の地域おこし協力隊という仕事でした。千葉県出身ということもあり、多古町が本制度を初めて導入するタイミングだったことも大きな決め手でした。私は0から1を生み出すことにやりがいを感じる性格なので、挑戦のしがいがあると思ったのです。

多古町での活動はフリーミッション型で、特に町から具体的な活動内容の指定はありませんでした。そこで私は、①やりたいことと②できることをそれぞれ決めて、活動をスタートしま

した。

### ① やりたいこと：子どもに関わる仕事

いつか中南米に戻ったときに関わりたい分野として、子どもに関する仕事をしたいと考えていました。そのため、多古町での活動を通じて学びを深めることにしました。ありがたいことに、保育士資格を取得し、3か月間の自然学校での研修を受け、多古町での子どもの野外活動を行う市民団体の立ち上げにも関わることができました。

### ② できること：国際交流事業の立ち上げ

「できること」と言うのは少しおこがましいかもしれませんが、多古町に来るまでの私の社会人経験は、ボリビアでの勤務のみでした。そんな私がこの町で始めたのが、成田空港に近いという地理的特性を活かした国際交流事業です。

とはいえ、実はそれは「建前」かもしれません。2022年4月に開催した第1回ラテンミュージックフェスタのきっかけは、単純に「ボリビアが恋しくて、日本でボリビアの音楽を聴きたかった」からでした。そこで、地域おこし協力隊の活動費（協力隊には年間決まった額の活動費用が割り当てられます）を活用し、自己事業として開催することにしました。

正直なところ、最初は観客30人ほどを集めて、小さなステージで一緒に音楽を聴きながら、自分自身が楽しく踊ればそれで十分だと考えていました。そんな軽い気持ちで、町役場の担当課に何気なく相談したことが、すべての始まりでした。

すると、町が所有するコンサートホールを管理する方、何度も音楽イベントを開催している方、音響・照明のプロなど、次々と人を紹介していただき、気づけば多くの方が前のめりにフェスタ開催に協力してくださることになったの

です。

少し話が変わりますが、私はこのラテンミュージックフェスタを開催するにあたって、大切にしている思いがあります。それは、「ボリビアの音楽、ひいては、ラテンミュージックを聞きにきてくれるお客さんの中で、たとえ1人でも、他の魅力を持って帰ってほしい。中南米を地球の裏側の世界ではなく、もっと身近に感じてほしい」です。



写真3-2 第一回コンサートでナタリア・サラサルボリビア臨時代理大使が来訪時に通訳を務める

そこで、1回目のコンサートから駐日ボリビア大使館ご協力のもとボリビアの写真パネル展、独立行政法人国際協力機構ご協力の下、ボリビアで活動歴のある元青年海外協力隊による活動紹介ブースを会場のホワイエに作ることができました。

先日2月2日に開催した、3回目のコンサートでは、千葉県で中南米の地域と姉妹都市関係にある市町の方が交流の歴史を紹介して下さり、食事、雑貨等もご紹介できるスペースを作ることができました。

このように様々な形で、中南米を愛する方々、関係者の皆様にご相談を差し上げ、ご協力いただけるように動くのも、私が地域おこし協力隊として、行政という枠の外で動くことのできた人材だったからだと感じています。（実際に、

地域おこし協力隊に行政の枠の外で動いて、地域に新しい風を期待する行政は多いと感じています。)

とはいえ、関係者が増えれば増えるほど、私自身が始めたきっかけ(=ボリビアが恋しいからボリビアの音楽を聞きたい)という思惑を実現するのはどんどん遠のいていっていると感じています。少しわかりにくい部分なのですが、ここでそれぞれの回の開催までの経緯を確認します。

1回目の開催は、私が協力隊の自己事業としてスタートしました。それは、私が全ての責任者であり、イベントの企画から調整、当日のスタッフまで1人で手配をしなければいけないということです。ここで特に辛かったのはチケットを販売することです。多古町にラテンアメリカというキーワードすらそれまで、無かったので、外から来た私がすんなり受け入れてもらえるはずもなく、町民への説明や広報に時間を割く余裕もなく、大変苦しい思いをしました。ここだけの話ですが、終了後、私はもう2度と自分でコンサートは企画しないと心に誓うまででした。



写真3-3 第一回ラテンミュージックフェスタ

2024年2月、第2回ラテンミュージックフェスタの開催が決まりました。今回は多古町の主催としての実施となりました。ちょうどこの年、千葉県が誕生150周年を迎え、各市町村が記念事

業を行っていたのですが、その一環として「多古町とボリビアの交流事業」が正式に採択されたのです。第1回目の開催は、私が1人で調整していたこともあり、必然的に今回も私が統括を務めることとなりました。こう書くと、まるで仕方なく引き受けたように思われるかもしれませんが、そんなことはありません。私はボリビアが大好きですし、第1回で関わってくださったメンバーと再び多古町でラテンミュージックフェスタを開催できることが、何より嬉しかったのです。また、町主催になったことで準備から当日まで動ける人材が増えたことも、大きな心の支えになりました。

そして何をおいても、イベントを企画する中心人物が楽しむ気持ちを忘れてしまっては、絶対にお客さんにラテンアメリカの楽しさは伝わらないと思っています！もちろん、第1回の経験を活かして余裕を持って調整できた部分もあれば、町主催になったことで負担が増えた部分もありました。しかし、最終的には「やってよかった」と心から思えるイベントになりました。ちなみに、この時初めてチョリータの衣装を着て司会を務めたのも、良い思い出です。

先日開催した第3回ラテンミュージックフェスタは、完全に町の国際交流事業という位置付けへと変わりました。そして、引き続き私が統括を務めました。今回のテーマは、これまでとは少し異なります。「県内で横のつながりをつくること」、そして「国ごとではなく、中南米全体に注目すること」。私にとってボリビアは特別な国ですが、それだけにとどまらず、中南米の多様な魅力を伝えることが大切だと感じるようになりました。

「多古町だけ」「多古町の中で」と枠を決めてしまえば、日本を出て感じた世界の広さや価値観の多様さを伝えることはできないのではな

いか— そんな思いから、千葉市、御宿町、大多喜町に協力を依頼し、それぞれ姉妹都市関係にあるメキシコやパラグアイの音楽を取り入れることにしました。



写真3-4 第二回コンサートの終了後集合写真

また、新たな挑戦として初めて野外会場を設営しました。カラフルなパペルピカドを飾り、メキシコの市場のような雰囲気を作れたかったのですが、当日の悪天候のため実現できなかったのは少し残念です。

読者の皆様へ

この記事を読んでくださっている方の中には、当日足を運んでくださった方もいるかもしれませんね。楽しんでいただけましたか？

私自身は、反省が多く残る回となりました。毎回、中南米の魅力と感じている—明るさ、樂觀的なところ、細かいことを気にしないところを取り入れたコンサートにしたいと思っておりますが、町役場の期待との間で生まれるジレンマをどう解決するかには、いつも試行錯誤を重ねています。

今回うまくいかなかったこともありました。しかし、それでも私は中南米、そしてボリビアが好きです。町の子どもたちには、外国人アーティストが多古町で演奏しているように、「君たちの活躍する舞台は、この地球のどこにでもあ

るんだ」ということ、そして私のようにボリビアに特別な愛情を感じている全ての方が集まるきっかけになるのであれば、もう少し頑張ってみてもいいかなと感じています。

次回、また皆様にお会いできることを楽しみにしています！

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。  
(終わり)



写真3-5 地域おこし協力隊として初めて、ボリビアのアイキレ町を訪れた。アイキレ町と多古町はまだ姉妹都市関係ではなく現在姉妹都市を目指して、交流をしています。

## 4. ボリビア開拓記外伝

### コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を生き抜いた人々 10

一般社団法人日本ボリビア協会  
相談役 渡邊 英樹

#### てんさい くる 天災に苦しむコロニアオキナワ

#### にくぎゅうしいく しょうれい 肉牛飼育を奨励

これでもかと襲いかかる災禍の連鎖の中にあ  
っても、頑張<sup>がんば</sup>って何が何でもここで生き抜<sup>ぬ</sup>こう  
と希望<sup>きぼう</sup>を捨てないでいる人たちには、何として  
も支援<sup>しえん</sup>を続けたい。

そこで、借<sup>か</sup>り入<sup>い</sup>れ金<sup>きん</sup>の全額<sup>ぜんがく</sup>でなくても、少<sup>すこ</sup>し  
でも返<sup>へん</sup>済<sup>さい</sup>の誠意<sup>せい い</sup>を見<sup>み</sup>せてくれた人<sup>ひと</sup>には、新<sup>あた</sup>し  
い貸<sup>か</sup>し付<sup>つ</sup>けをす<sup>す</sup>ると公<sup>こう</sup>言<sup>げん</sup>した。しかし、干<sup>かん</sup>ばつ  
によって米<sup>まい</sup>作<sup>さく</sup>等<sup>とう</sup>の収<sup>しゅう</sup>穫<sup>かく</sup>が望<sup>のぞ</sup>めなくな<sup>な</sup>ってしま  
った。このため農<sup>のう</sup>作<sup>さく</sup>物<sup>もつ</sup>の栽<sup>さい</sup>培<sup>ばい</sup>ではなく、牧<sup>ぼく</sup>草<sup>そう</sup>  
と雑<sup>ざつ</sup>草<sup>そう</sup>があれば、どうにか飼<sup>し</sup>育<sup>いく</sup>が可<sup>か</sup>能<sup>のう</sup>な肉<sup>にく</sup>牛<sup>ぎゅう</sup>  
の放<sup>ほう</sup>牧<sup>ぼく</sup>で急<sup>きゅう</sup>場<sup>ば</sup>をし<sup>し</sup>の<sup>ごう</sup>という方<sup>ほう</sup>針<sup>しん</sup>に切<sup>き</sup>り替<sup>か</sup>え  
た。

オキナワ中央病院の篤<sup>あつ</sup>進<sup>しん</sup>・小<sup>お</sup>笠<sup>がさ</sup>原<sup>はら</sup>博<sup>ひろし</sup>  
両<sup>りょう</sup>医<sup>い</sup>師<sup>し</sup>からは「ここでの手<sup>しゅ</sup>術<sup>じゆつ</sup>は恐<sup>おそ</sup>ろしい。  
栄<sup>えい</sup>養<sup>よう</sup>状<sup>じょう</sup>態<sup>たい</sup>が悪<sup>わる</sup>いので簡<sup>かん</sup>単<sup>たん</sup>な盲<sup>もう</sup>腸<sup>ちよう</sup>手<sup>しゅ</sup>術<sup>じゆつ</sup>でも、  
血<sup>けつ</sup>圧<sup>あつ</sup>がガクンと落<sup>お</sup>ちてしま<sup>し</sup>まう」という話<sup>わ</sup>も  
聞<sup>き</sup>いていた。

メス牛<sup>うし</sup>から搾<sup>しぼ</sup>れる牛<sup>ぎゅう</sup>乳<sup>にゅう</sup>によって、婦<sup>ふ</sup>女<sup>じょ</sup>子<sup>し</sup>  
の栄<sup>えい</sup>養<sup>よう</sup>状<sup>じょう</sup>態<sup>たい</sup>の改<sup>かい</sup>善<sup>ぜん</sup>にも役<sup>やく</sup>立<sup>だ</sup>つた<sup>らう</sup>と考<sup>かんが</sup>えて  
のこ<sup>う</sup>で<sup>あ</sup>った。このためメス牛<sup>うし</sup>の子<sup>こ</sup>20頭<sup>とう</sup>  
購<sup>こう</sup>入<sup>にゅう</sup>資<sup>しん</sup>金<sup>きん</sup>を融<sup>ゆう</sup>資<sup>し</sup>した。出<sup>しゅつ</sup>生<sup>しょう</sup>率<sup>りつ</sup>80%と想<sup>そう</sup>定<sup>てい</sup>  
し、16頭<sup>とう</sup>の出<sup>しゅつ</sup>産<sup>さん</sup>を見<sup>み</sup>込<sup>こ</sup>んだ。

生ま<sup>う</sup>れる子<sup>こ</sup>牛<sup>し</sup>の性<sup>せい</sup>別<sup>べつ</sup>が半<sup>はん</sup>々<sup>はん</sup>であれば、メスと  
オス8頭<sup>とう</sup>づつと想<sup>そう</sup>定<sup>てい</sup>。オス牛<sup>うし</sup>は太<sup>ふと</sup>らせて、1年<sup>ねん</sup>  
後に肉<sup>にく</sup>牛<sup>ぎゅう</sup>として換<sup>か</sup>金<sup>きん</sup>できる。それを営<sup>えい</sup>農<sup>のう</sup>資<sup>しん</sup>金<sup>きん</sup>  
や生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>費<sup>ひ</sup>の一<sup>いち</sup>部<sup>ぶ</sup>に充<sup>ちゅう</sup>当<sup>とう</sup>する。メス牛<sup>うし</sup>8頭<sup>とう</sup>は  
繁<sup>はん</sup>殖<sup>しよく</sup>用<sup>よう</sup>に残<sup>のこ</sup>し、さら<sup>さら</sup>にその方<sup>ほう</sup>式<sup>しき</sup>で年<sup>ねん</sup>々<sup>ねん</sup>頭<sup>とう</sup>数<sup>すう</sup>を  
増<sup>ふ</sup>やして<sup>い</sup>く計<sup>けい</sup>画<sup>かく</sup>だ。

実<sup>じつ</sup>は、この計<sup>けい</sup>画<sup>かく</sup>には先<sup>せん</sup>例<sup>れい</sup>があ<sup>だ</sup>った。第<sup>だい</sup>2コロ  
ニアの玉<sup>たま</sup>城<sup>しろ</sup>輝<sup>き</sup>俊<sup>しゅん</sup>さんが辛<sup>しん</sup>抱<sup>ぼう</sup>強<sup>きやう</sup>くこうして頭<sup>とう</sup>数<sup>すう</sup>  
を増<sup>ふ</sup>やして、干<sup>かん</sup>ばつにも負<sup>ま</sup>けず<sup>に</sup>、牧<sup>ぼく</sup>場<sup>じやう</sup>経<sup>けい</sup>営<sup>えい</sup>  
でし<sup>し</sup>っか<sup>り</sup>と経<sup>けい</sup>済<sup>ざい</sup>基<sup>き</sup>盤<sup>ばん</sup>を確<sup>かく</sup>立<sup>りつ</sup>して<sup>い</sup>た。

これをモ<sup>も</sup>デル<sup>でる</sup>ケ<sup>け</sup>ースとしてコロニアオキナワ  
に広<sup>ひろ</sup>めようとしたのだ。



写真4-1 融資によって導入されたコロニアオキナワの子牛  
と著者の長女

#### たずさ げんきんゆうそう ピストル携<sup>けん</sup>え現<sup>げん</sup>金<sup>きん</sup>輸<sup>ゆう</sup>送<sup>そう</sup>

借<sup>かり</sup>入<sup>い</sup>れ金<sup>きん</sup>の返<sup>へん</sup>済<sup>さい</sup>に誠<sup>せい</sup>意<sup>い</sup>を示<sup>しめ</sup>してくれ<sup>ら</sup>た<sup>ら</sup>新<sup>しん</sup>規<sup>き</sup>貸<sup>か</sup>  
付<sup>つ</sup>し付<sup>け</sup>をす<sup>す</sup>るとい<sup>う</sup>方<sup>ほう</sup>針<sup>しん</sup>は当<sup>とう</sup>然<sup>ぜん</sup>のこ<sup>と</sup>な<sup>が</sup>らそ  
の件<sup>けん</sup>数<sup>すう</sup>と頻<sup>ひん</sup>度<sup>ど</sup>も多<sup>おほ</sup>くなる。

海<sup>かい</sup>外<sup>がい</sup>移<sup>い</sup>住<sup>じゅう</sup>事<sup>じ</sup>業<sup>ぎやう</sup>団<sup>だん</sup>サン<sup>し</sup>タ<sup>ぶ</sup>クル<sup>く</sup>ス支<sup>し</sup>部<sup>ぶ</sup>の融<sup>ゆう</sup>資<sup>し</sup>  
責<sup>せき</sup>任<sup>にん</sup>者<sup>しゃ</sup>にな<sup>る</sup>とい<sup>う</sup>こ<sup>と</sup>は、自<sup>み</sup>ら<sup>が</sup>が現<sup>げん</sup>金<sup>きん</sup>を  
輸<sup>ゆう</sup>送<sup>そう</sup>して、借<sup>か</sup>り入<sup>い</sup>れを<sup>い</sup>じ<sup>ゆう</sup>し<sup>や</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>ひ</sup>と<sup>り</sup>ひ<sup>と</sup>り  
に、直<sup>ちよく</sup>接<sup>せつ</sup>手<sup>て</sup>渡<sup>わた</sup>すこ<sup>と</sup>を<sup>い</sup>み<sup>する</sup>。

コロニアには銀<sup>ぎん</sup>行<sup>こう</sup>など存<sup>ぞん</sup>在<sup>ざい</sup>しな<sup>い</sup>。小<sup>こ</sup>切<sup>ぎ</sup>手<sup>て</sup>は  
通<sup>つう</sup>用<sup>よう</sup>せ<sup>ず</sup>、現<sup>げん</sup>金<sup>きん</sup>取<sup>と</sup>引<sup>り</sup>のみが信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>で<sup>き</sup>る唯<sup>ゆい</sup>一<sup>いつ</sup>の

ものだった。当然、現金輸送時に襲撃を受け  
 の可能性などを想定しなければならなかった。  
 極めて危険を伴う仕事であった。支部とコ  
 ロニアの事業所との間の連絡は電話がないの  
 で、無線通信でやりとりしていたが、私の  
 現金持参の出張が筒抜けにならないように  
 乱数表を用意していた。

乱数表は、A、B、Cの3種類あり、数字  
 を読み上げて事業所に出発時間を知らせ、  
 予定通りに到着しなかった場合は事業所から  
 偵察隊を出す手はずになっていた。しかし、そ  
 んなものはまったくの気休めでしかなかった。

コロニアでは牛の購入などの取引は全て  
 事業団の融資が前提になっていた。

このため取引が迫れば、現金が運ばれてくる  
 貸し付けの実行日時が簡単に、現地社会にも知  
 れ渡ってしまうのだ。もし襲われたら偵察隊が  
 到着しても後の祭り、ただ死体の確認をす  
 るだけのことである。

そしてやっかいなのはインフレが激しいた  
 め、貨幣価値が落ちて大量の紙幣を必要とす  
 ることだった。貸付当日に紙幣がそろそろ保証が  
 ないので、前日までに麻袋2、3袋にぎっし  
 りと詰め込んだ大量の紙幣を準備することに  
 なる。

支部の玄関に鍵を掛け、さらに安全と思える  
 部屋に鍵を掛け、同僚の職員と2人で麻袋  
 を枕にして泊まり込むことになる。強盗に襲  
 われても対処できるよう枕元にピストルを置  
 いて眠りに就くのだ。

翌朝出発し、コロニアに着くと農協の

事務所へ行く。部屋の机の上に紙幣を積み上  
 げ、一人一人を部屋に招き入れて契約書を交わ  
 して現金を渡す段取りだ。私はいつでも手の  
 届くところにピストルを置き、同行してくれた  
 同僚には入り口のドアの陰にピストルを持っ  
 て隠れてもらった。

確認をもって言えないことが、むしろ幸運  
 なのかもしれないが、一度だけ現金を積んだ  
 車を運転している時、開け放した窓から私  
 の耳元に「シュー」という鋭い音がしたこと  
 があった。あれは虫の羽音などではなく、弾丸  
 がかすめた音であったと思っている。

このころは何の根拠もなく「何かを守られて  
 いる」と信じて生きていた。至る所に危険が  
 潜んでおり、そう思わなければやっていられな  
 いことばかりだった。サンタクルス支部とコロ  
 ニアを往復するたびに、道路脇で事故車の  
 残骸を目にした。

その大半はサトウキビを運搬しているトラッ  
 クだ。サトウキビは刈り取りから時間が経過す  
 るにつれて糖度が落ちる。取引価格は糖度で決  
 まるので、運転手は値段が下がらないようにと  
 一刻を争って、トラックを夜通し走らせる。  
 ほとんど寝てないため眠気払いに、運転手の  
 大半はコカの葉をかんでいた。

こんな危険極まりない暴走トラックが道路を  
 頻繁に行き来していた。サンフアン自治体の  
 車も衝突されて3人が死亡し、海外移住  
 事業団の同僚の乗った車も、そんなトラッ  
 クに正面衝突された。助手席に乗ってい  
 た奥さまは、まだ1歳の乳児をかばわれたので

あろう。あか きず ぶ じ  
 赤ちゃんは傷ひとつなく無事だったが  
 おく そくし  
 、奥さまは即死だった。

おっと じゅうしょう たいいん  
 夫も重傷であったため退院するまで、そ  
 あか わ や あず  
 の赤ちゃんを我が家で預かった。

すいがい はっせい おそ き の  
 水害が発生する恐れがあるとセスナ機に乗  
 すいめん  
 て、リオグランデの水面すれすれのアクロバッ

ひこう く かえ みずかさ じょうたい  
 ト飛行を繰り返してもらって水嵩の状態を  
 しさつ ひつよう ていさつじょうきょう あさぶくろ  
 視察する必要があった。偵察状況を麻袋に

か すなぶくろ おも い  
 書き、砂袋を重しとして入れて、コロニアの  
 みな ふあん みまも じょうくう せんかい だい  
 皆さんが不安げに見守る上空を旋回して第1

うんどうじょう とうか かちく いどう  
 コロニアの運動場に投下した。家畜を移動さ  
 いな はんだん し  
 せるか否かの判断を知らせるためだ。

しごと だれ  
 このため、この仕事は誰もやりたがらなかつ  
 わたし にんむ  
 た。だから私の任務となっていた。

い とき ゆいつ ていきびん うんこう  
 ラパスに行く時は、唯一の定期便を運航す  
 しゃ どうしゃ  
 るロイド社の旅客機に乗っていた。しかし同社

よさんぶそく きたい せいび もんだい うわさ  
 は予算不足から機体の整備に問題があると噂  
 されていた。

うらづ しゃ しんぶん ぜんめん  
 それを裏付けるボーイング社の新聞の全面  
 こうこく けいさい しゃ  
 広告が掲載された。「Lloyd Aereo Boliviano社

さいざん かんこく きたいせいび  
 は、再三の勧告にもかかわらず機体整備をしない  
 いご こうくうきじこ  
 ので、以後の航空機事故については、ボーイ

しゃ いっさい せきにな お か  
 ング社は一切の責任を負わない」と書かれてい  
 ました。

の え しごと  
 それでも乗らざるを得ない仕事があった。  
 ゆうし げんきん か つ  
 融資の現金貸し付けは、コロニアサンファンは

のうきょうじむしょ しょ す  
 農協事務所1カ所で済ますことができたが、  
 だい  
 コロニアオキナワは第1・2・3のそれぞれの

のうきょうじむしょ おこな たいへん かい  
 農協事務所で行うので大変だった。1回の  
 しゅつちょう けん おお とき けんちか か  
 出張で50件、多い時は80件近くの貸し

つけ おこな  
 付けを行うのである。

たいりょう しへい の くるま だい  
 大量の紙幣を載せた車で第1・2・3コロ

ニアを回り、3カ所で農家への融資を済ませる  
 まわ しょ のうか ゆうし す  
 と、それまで張り詰めていた緊張感が一気に

ゆる どうじ げんきん ぶ じ くば お  
 緩んだ。同時に現金を無事に配り終えた  
 そうかいかん ひろ きろ き  
 爽快感が広がってくる。このため帰路には決ま

おこな げんせいりん ひろ  
 って行くことがあった。原生林だけが広がる  
 ひと みち くるま と ごうとうしゅうげき そな  
 人けのない道に車を止めて、強盗襲撃に備

けいこう そら む すべ  
 えて携行していたピストルを空に向け、全ての  
 たま う はな こうれい ぎしき  
 弾を撃ち放つのだ。これが恒例の儀式となつて

いた。(つづく)



琉球新報社のご厚意で転載させていただきます。

ご関心を持たれた方は下記琉球新報社URLをご覧ください

<https://store.ryukyushimpo.jp>

★スペイン語版が発刊されました☆

本誌で『ボリビア開拓記外伝』（琉球新報社 1900円+税）の小分けの連載（全漢字ルビ付き）をしておりますが、そのスペイン語訳本『BOLIVIA REGISTRO DE UNA HISTORIA PARALERA』が、明石書店(2500円+税)より出版されました。



訳者の大城ロクサーナさんと筆者

## 5. ボリビアの家庭料理雑感

一般社団法人日本ボリビア協会

常務理事 細萱 恵子

ラパス居住の方とメールのやりとりをしているうちに、ボリビアに滞在していたのは40年以上も前の1980年代初頭であり、青年海外協力隊時代の高々2年の経験だったのに、その当時の料理の名前とか、研究所からランチに帰って来た時の、キッチンから漂ってくるスープの匂い、スパイスの香りなどが思い出されて、自分でも懐かしく思い、ちょっと書き残しておこうとペンを執りました。

### 1. 「南米料理を楽しむ会」

当協会の「南米料理を楽しむ会」では、昨年度はコチャバンバの伝統的料理である「シルパンチョ」(Silpancho、ケチュア語：Sillp'anchu)と「チリ風セビーチェ」(cebiche)でした。



写真5-1 ケチュア族の伝統的料理シルパンチョ



写真5-2 セビーチェはペルーやチリ料理として有名だが、ボリビアでも食べられている。

今年度はサンタクルスやアマゾン地域の典型的家庭料理である「マハディート・デ・チャルケ」(majadito de charque)と「アサディート・コロラド」(asadito colodado)を作りました。聞

くところによると、「マハディート・デ・チャルケ」はサンタクルスに駐在された方々が一番懐かしく思い出される料理とのことで、20人を超える参加者がグループに分かれて調理をし、出来上がったものはグループ毎に食べ、シンガニヤワインなどを差し入れていただいた維持会員のマックス建材さんのお陰で、いい具合に酔いながら、でもしっかりと後片付けをして終了しました。

### 2. ラパスでの食事

来年はラパス料理かな、と考えているうちに、色々な料理を思い出しました。私はボリビア派遣時にはラパス市内、サンアンドレス大学の近くで以前JICA事務所があった通りのマンションの3LDKの主寝室(バストイレ付)にホームステイしていました。角部屋で窓ガラスが一面天井まで届くくらいで、イリマニ山が一望できました。朝のイリマニ、日の入りのイリマニ、刻一刻と変わるイリマニの景色は絶景だったなぁと今にして思います。当時月に400ドルの手当てだったように記憶していますが、その当時の大統領の給料をドル換算すると100ドルにしかない、という円高の良き時代で、美味しいレストラン等にも結構行っていました。

基本的には朝食はパン一個とコーヒーで、昼食はホームステイの家で食べ、夜はランチの残りのスープ(sopita)とか、Chifaでテイクアウトするとか、日本食レストランに行くとか、美味しい現地の料理を求めて外食するか、という食生活でした。

10時になると国立民族学研究所の研究室に女性と小学生くらいの娘が「té o café?」と聞きながらサルテーニャを持ってきてくれます。これも楽しみでした。ランチの時間になると、バスに乗って(もしくは歩いて)、家に帰って食べます。ランチは皆家に帰って食べるので、道路

は渋滞し、なかなか動きませんので歩いて帰ることが多かったです。ラッシュアワーは朝とお昼時、帰りの3回ありました。

セニョーラの家ランチはスープから始まり、前菜（ほとんどがサラダ）、メイン料理、たまにデザートと最後にコーヒーか紅茶でした。これらの料理はお手伝いさんが朝から買い出しに行き、午前中ずっと料理していました。基本のスープはまず骨などを大なべに入れてじっくり煮こんでだしを取り、それから人参、ジャガイモ、チューニョなどを入れた塩味のスープです。でも味は優しく、豆、野菜もたっぷりと摂れ、美味しい家庭の味でした。キヌアは一掴み最後に入れていました。ここにセロリや香味野菜が付け加えられることもありました。フィデオが入り、トマト味のミネストローネになることもあります。何を作るかは朝、まずセニョーラと相談し、それからカラフルなビニールの袋を持ってメルカードに買い出しに行って、調理が始まります。

ただ、セニョーラとも仲良くやっていたように見えて、結構落ち着かないというか、友達同士のネットワークなどでより良い条件の方へ簡単に行ってしまうことも目にしました。理由としてはいきなり「実家の母親の世話をしなければいけないから明日からもう来れない」などです。本当だったかも知れませんが、セニョーラは信じている風はありませんでした。だから新しく来た10代のお手伝いさんが友達とパーティするから1日だけカメラを貸してと言われましたが、いつ消えるとも限らず、自信が無くて貸せませんでした。当時は私にも簡単に買えるという金額でもありませんでした。

スペインでもそうでしょうが、ラテンアメリカの国々では当時まだランチが正餐でした。ランチがスープから始まるフルコースでしたので、

誕生日パーティに招待されて行くのもランチでした。そういう時のメイン料理は日常の牛肉 (carne de res) とか豚肉 (cerdo) ではなく、鶏肉 (pollo) でした。肉の内、鶏肉が一番ランクが上の食材で、今日は誕生日の食事だから鶏肉よ、と説明を受けました。ランチと言ってもそういう時は1時開始と言いながら、全員集まるのは2時過ぎという感じで、食事が終われば皆で踊りだす、という流れで時には夜半まで掛かります。

日常の生活では、ランチの後は、siestaをして3時ごろ研究所に戻りました。当時はそれが普通の勤務形態でした。お店も銀行もお昼で一旦閉店となり、午後は3時に開店でした。ラパス居住の方の話では、現在は近代化、効率化という方針でランチに戻ることはなく、当然siestaの習慣もなくなっているそうで、ちょっと寂しい感じがします。また余談ですが、siestaの習慣が残っているスペインが日本を抜いて、次の長寿国になるとかで、siestaがストレスをなくし、健康に良いそうです。



写真5-3  
懐かしいおやつ、サルテーターニャ

### 3. Sirvienta? Empleada? Muchacha?

話は全く変わりますが、当時ラパスでは家のお手伝いさんのことを「sirvienta」と呼んでいました。私の10年位後から、ボリビアに居住している方に聞くとそのsirvientaという言葉聞いたことがないとのことで、びっくりしました。今は「empleada」と言ったり、「empleada múltiple」だそうです。「sirvienta」ではいわゆ

るservantで召使というような言葉から来ているからでしょうが、「被雇用者」となって人権に配慮しているというところでしょうか。コロンビアに駐在していた12, 3年前にはsirvientaは使わない方が良い、muchacaが良いと言われましたが、良い年齢の女性をmuchachaと呼ぶのも私は躊躇されました。

スープを煮こんでいる間に、各部屋のベッドメイキングをしたり、掃除をしていましたが、手早かったですね！余談ですが、子供たちの家庭の様子を見ると、夫婦でフルタイムで働き、家に帰ってから食事の支度、洗濯物の始末などの生活を見ると、こんなお手伝いの人がいたら良いのに、と思います。子供たちもお手伝いさんの有難さが良く分かっていて、「ここにマリアがいたらなあ」などと懐かしんでいます。

#### 4. ギソ・デ・コネホ (guiso de conejo)

ボリビアのメイン料理で思い出すのはペヘレイのムニエル (pejerrey a la romana) と、guiso de conejoです。当時私が一番好きだった料理はguiso de conejoで、ラパス料理と言ったらこれか、と考えたのですが、ネットで調べてみると、この料理も元はと言えばcochabamba起源の料理のようです。「この料理は何という料理か」とセニョーラに聞くと、ウサギ肉のギソというので、ぎょっとして、手を止めると、「安心して、これは牛肉だから」と笑われました。コロンビアに駐在しているときは、この料理をもはやguiso de conejoとは呼ばず、guisoで済ませていました。見た目も味も同じで牛肉を薄く延ばして小麦粉をまぶして油で揚げ、玉ねぎやにんじんなどをみじん切りにして炒めた黄色のソースguisoで煮る、もしくは上にたっぷり掛けたものです。

ネットで見るとたくさんのguiso de conejoが出てきて、Cookpadに提案されたそれぞれの家庭

のguiso de conejoを見てもはや同じ料理なのか疑問に思うくらいのバラエティがあります。レシピで実際にウサギ肉を使っているのも多いです。肉を白ワインで煮こむというようなguisoは単に肉の白ワイン煮としか思えません。煮込み料理をguisoと呼んでいるとしか思えません。ではguisoが何を意味する言葉なのか、ということから調べてみると、guisar、つまり「料理する」という動詞から派生しています。料理だけでなく、家事一般を指して、「家では母がguisarしています」などということもあるようです。guisoは、家庭料理の代表のような料理を指すものと思われ、冷蔵庫にあるもの何でもがguisoの材料となるようです。それで地域ごと、家庭ごとにguisoのレシピがとんでもなく違うのですね。

guiso自体には2つの意味があり、シチューもしくはドレッシング、つまり煮込むもの、もしくは和えるものであるという説明があります。牛肉や鳥のもも肉を調理したものにguisoを掛ける(ドレッシング)、もしくはguisoで煮こむ(シチュー状)料理で、guiso de ~と呼んでいます。ソースや添え物のようにguisoを半分肉に掛けた料理から、肉をguisoで煮込むシチューまでguisoですから、外見上、同じ名前の料理とは思えない位です。



写真5-4 guiso  
シチュータイプ

写真5-5  
guiso de carne  
(ソースタイプ)



そのguisoの作り方というのは、家にいたお手伝いさんから聞いたレシピでは、玉ねぎを透き通るまで炒め、トマト、にんじん、にんにくのみじん切りを加えて、また炒める。そこに基本はサフラン、タイム、クミンなどのスパイスを入れたソースです。冷蔵庫にあるチョリソやハム、ベーコン、ピーマン、ズッキーニなどを入れて煮込めば、ラタトゥイユとも言えます。guisoといったらいわゆるスペインや中南米地域の「おふくろの味」なのかもしれません。次回の「南米料理を楽しむ会」ではボリビアの家庭料理「guiso」に挑戦してみましょう。

以上

## 6. 編著者本人によりご紹介

### 『ボリビアを知るための65章

(第3版)』明石書店 2025年  
立教大学ラテンアメリカ研究所  
大島 正裕

この度、明石書店より当方が編著をつとめた『ボリビアを知るための65章(第3版)』が刊行された。初版(68章)、第2版(73章)でも、当方は、ボリビア近代史のパートを担当したが、初版は2006年刊、第2版は2013年刊であり、その間の2009年、ボリビアはエボ・モラレス政権下で共和国から多民族国に代わる大きな転換期を迎えた。この現状に対応するために初版に5章を追加した第2版が刊行されたが、ベースになった初版から既に20年近く経過したこともあり、今回の第3版の刊行を契機に全面的に改定されることになった。それに伴い、当方が僭越ながら編著をつとめることになり、この交代に伴い執筆者陣も刷新することになった。とはいえ、第2版までの版(ここではとりあえ

ず旧版と呼ばせていただく)が全く古くなったわけではない。各分野を開拓されてきた研究者がダイナミックにボリビアの社会や歴史を分析してみせた旧版は、研究の細分化が進み全体を見通すことが難しくなった今、別の価値を持つはずである。さらに、旧版の編著をつとめた真鍋周三先生(兵庫県立大学名誉教授)は私の敬愛する兄弟子、恩師であり、また一流の登山家でもある。今回の版では、アンデスの過酷で壮麗な山々を描く章については先生不在の中、削除せざるをえなかった。とはいえ、今回の第3版が、ボリビアに精通した執筆者による現在の日本のボリビア研究のひとつの到達点である点は強調しておきたい。

本書の前書きにも書いたので繰り返さないが、本書の話を真鍋先生からいただいたのは2022年である。最初は困り果てお断りしたのだが、現在のボリビア研究のフロントランナーである梅崎 かほり先生、岡田勇先生、佐藤正樹先生、藤田護先生、宮地隆廣先生からのご支援を得ることができたことに勇気づけられ、何とか編著者として最後まで仕事を全うすることができた。

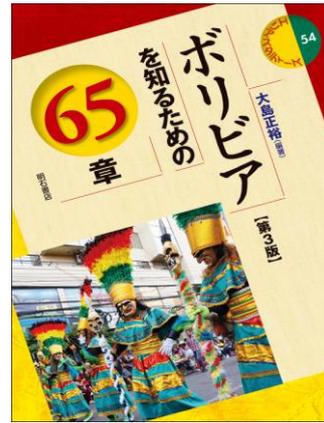
ボリビアと私の付き合いについても、前書きでも一部触れたが、もう30年近くなる。一目ぼれた国にも住んで、この国を肌身で感じることができた。だが、この国を研究対象としてきたのは単に好きだっただけでなく、この国が仕事相手先だったからである。この国の社会構造や複雑な歴史を知らなければ様々な業務遂行は難しい。世界に向けて「多民族性」を掲げた理由を知らなければ、ボリビアという国を理解し、彼らの目線に立って共に仕事することはできない。「多民族性」や「より良く生きる(vivir bien)」、こうしたメッセージを理想論と放置せず、真摯に向き合うことが重要であり、先に上げたフロントランナーの先生方もそこを熱心に掘り下げていた。ウクライナ戦争をはじ

めとして数年前には考えられなかったことが頻発し、迷走を深めている現在。南米から発信されたメッセージに耳を傾けることが、現代社会再考の糸口になるかもしれない。

私には、昔から自分の立ち位置と研究対象国とのつながりを歴史的に把握したいという強い欲求があり、編著者になったのを契機に日本とボリビアの両国間を考えるためのパートを挿入した。この第八部「日本とボリビア」は、編著者である私のこだわりである。19世紀末にペルーへやってきた日本人移民がボリビアに流れてきたのを端緒とし、それがボリビアのアマゾン地域に定着していき、戦後はサンタクルス県に2つのコロニーが創設され、さらに現在はボリビアの日系人たちが日本に戻り鶴見などの街に定着している。この円環は両国の深いつながりを表すものだろう。ボリビアは、2025年建国200周年を迎える。この200年のうち、日本はこの国と100年以上のつながりがある。

本年はサンタクルス県のサン・フアン移住地の創立70周年でもあり、両国では幾つかのイベントも用意されているとも聞いている。今後の両国関係の深化に本著が少しでも貢献することを祈るばかりである。

末筆ながら、本著作成に協力いただいた方々、写真を提供してくれた友人たちに本書刊行につき御礼申し上げます。 以上

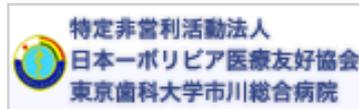


『ボリビアを知るための65章』第3版 2025年  
編著者：大島正裕  
明石書店  
2000円+税

#### 編集委員

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司

#### ◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2025

一般社団法人日本ボリビア協会  
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)